

プライミング刺激が選択的道德不活性化に及ぼす影響

杉田 明日香

(有馬 淑子ゼミ)

はじめに

昨今、いじめによる自殺や残虐な殺人などがニュースでも大きく取りざたされ人間の攻撃性、反社会的行動に関する研究はより重要性を持っている。その中で、近年の研究成果により、認知の歪みが人間の攻撃性や反社会的行動に重要な役割を果たすことが明らかとなってきた(吉澤, 2004)。認知の歪みとは元々ベックが概念化し、心理療法として構造化したものである(Beck, 1979)。こういった思考パターンはその個人に現実を不正確に認知させ、ネガティブな思考や感情を強化させるとされている(Grohol & John, 2009)。

反社会的行動を解明する心理学的研究においては、認知的歪みに焦点をあてた研究への変遷が認められている。攻撃性研究では、Freud (1920)の本能による説明が有名であったが、実証困難であるといった批判を契機に多くの理論が展開され、近年では認知の歪みを直接的に扱う社会的情報処理研究が主流となりつつある。犯罪者や非行少年における認知の歪みも否定しようのない事実として存在することも明らかとなっている。

認知の歪みを検討する上で、主流となりつつある社会的情報処理研究領域では、攻撃性との関連を検討する上で、特に潜在知識構造の果たす役割が重視されている(Burks, 1999a; Burks, 1999b; Zelli, 1999)。内的表象として潜在知識構造を質的側面と構造的側面の指標から測定し、その指標が三年後の問題行動をも予測する知見も得られている(Burks, 1998)。質的側面からの研究では攻撃的な子供における攻撃を正当化する信念の強さが関わっているという報告もある(Erdly & Asher, 1998)。

質的側面と構造的側面を説明する理論として、質的側面ではBanduraの道德不活性化理論、構造的側面では社会的情報処理理論(Crick & Dodge,

1994)がある。

また、上記の情報処理に影響することで攻撃的な反応を導くと仮定される外的効果としてプライミングが挙げられる。(Huesmann & Kirwill, 2007)暴力のプライミングが暴力に関連する期待を活性化することで、歪んだ状況の解釈が行われ、攻撃行動が促進するという先行研究もある(Anderson, C. A 2002)。

社会的情報処理理論

社会的情報処理理論とは社会的情報処理研究において、認知のプロセスを重視するものである。これは認知心理学の理論を採用することで状況依存的な社会的情報処理過程を精緻化したモデルである(Crick & Dodge, 1994)。

そのモデルでは情報処理段階を分類する上で、過去経験により内的表象として体制化された潜在知識構造(たとえば記憶貯蔵、獲得されたルール、社会的スキーマ)と、より直接的に行動を規定するオンライン処理(たとえば手掛かりの処理、目標分類、反応決定)が明確に区別されている。ある社会的状況に直面する際に、その状況にある社会的手がかりを知覚、符号化、表象することで解釈を行い、その解釈に照らし合わせて適切だと考える反応を潜在的知識構造の中から検索し、その中の最も有効と思われる反応を決定、実行する。

この社会的情報処理モデルによると、攻撃行動や向社会行動などの社会的行動は、外部から得た情報の認知、解釈とそれに応じた行動の意思決定プロセスを含む一連の認知的ステップを通して実行される。つまり社会的な情報はその場面の応じた最適な行動を決定するために、長期にわたって保持された経験や考え、記憶の集合体で形成された潜在知識データベースを基にして、オンラインで処理されることになる。例えば人を殴ってはいけないという規範であったり道徳性を強く持ってい

る人は、もし自分に不利な状況や欲求不満場面でも、暴力による解決を選択しないことが予想される。しかし、自分が何らかの不利益を被るときは、人を殴っても仕方ないという知識構造を持っていた場合、そうでない人と同じ欲求不満場面に遭遇した時に人を殴ってしまう可能性は高い。このように基本的には、潜在知識構造が状況や対象に依存したオンライン処理にエラーやバイアスを生じさせることで、間接的に反社会的行動に影響を及ぼすというプロセスを経ていると考えられる。

つまり反社会的行動を起こす人は経験や学習により蓄積される知識構造が歪んでいると考えられる。その歪みの内容的な側面を説明しているのが道徳不活性化理論である。そのプロセスを図1にまとめる。

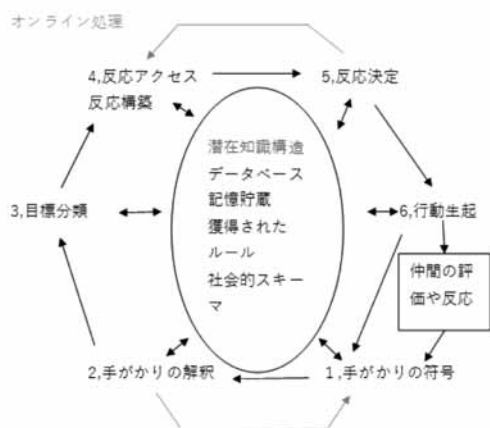


図1 道徳不活性化にかかわるオンライン処理の概念図

道徳不活性化理論

Bandura が提唱した、内的表象として潜在知識構造を質的側面からとらえた理論である。Bandura はモデリングや自己効力感といった概念を導入した社会的学習理論が有名であるが、近年は同理論を拡張した社会的認知理論の立場をとり、行動決定に至る自己調節により媒介過程に関する検討を積極的に行っている。こうした調節過程は既存の概念としては道徳性と呼ばれ、この自己調節過程が個人差や社会的文脈により機能しなくなる現象を道徳不活性化として説明し、多様な非道徳的行動や反社会的行為を説明する概念として提唱している。道徳不活性化は行為の認知解釈

に関する下位分類として「道徳的正当化」「婉曲なラベル」「都合のいい比較」の3分類、危害を加えている主体としての役割をあいまいにしたり、過小評価したり、否認するなどの機能を果たす下位分類として「責任の転嫁」「責任の拡散」「結果の無視や矮小化」の3分類、被害者に関する下位分類として「非難の帰属」「非人間化」の2分類を概念化することで、認知の歪みの内容を整理している。

これらの下位分類を含む道徳不活性化は攻撃行動や反社会的行動などの非人間的な行動と関係していることが分かっている (Bandura et al., 1996)。

例えば、Pelton et al. (2004) の研究では、青年期のサンプルにおいて道徳不活性化が少年の反社会的行動や攻撃行動と強い関連を示している。また、Bandura et al. (1996) は道徳不活性化が高い敵意的反すう（他者に対1する否定的な事象を何度も繰り返し考え続けること）と関連し、その敵意的反すうが攻撃行動を高めることを示すことで、道徳不活性化が敵意的反すうや短期などの気質的要因を媒介して攻撃行動を高めることを明らかにしている。これらの結果は、道徳不活性化は直接、攻撃行動に影響を及ぼすだけでなく、怒り感情を含むほかの認知プロセスと関係して間接的にも攻撃行動に影響を及ぼすことを示唆している。さらに Paciello et al. (2008) は横断研究のなかで道徳不活性化の攻撃性との関連や持続性はその発達に個人差があることを示している。これらのことから道徳不活性化としてモデル化される自己調節過程を含む社会的認知のプロセスは個人の攻撃行動の長期的、短期的増減を説明する一つの要因であるといえるだろう。

道徳規範と、行動との認知的不協和を解消するため、道徳不活性化は戦争時の兵隊やいじめの加害者などに多く起こっているとされているが、道徳を不活性化することにより攻撃行動を促進するという知見は多くある (Menesini et al., 2003)。

状況に応じて人間の道徳的範囲が狭められる際には、認知的なおかつ選択的道徳不活性化のメカニズムが作用していると考えられるが、道徳不活性化は潜在知識構造である道徳性が周りの環境要因の影響や、認知的不協和の解消のために起こる自己防衛だと考えるならば、そのメカニズムは社

会的情報処理理論でのプロセスを経ていると考えられる。

また、Crick & Dodge (1994) は、社会的情報処理プロセスが自動的なものであり、そうした測定的重要性に言及している。自動的な処理を行うにあたって、プライミングが効果的だと考えられる。プライミングとは、先行刺激が意図せず後の刺激に影響を与えるというものである。プライミングは人間の無意識に影響を与える外的刺激である。そのため人間の潜在知識構造の一つである道徳性にもプライミングは影響を与える可能性が示唆される。

暴力とプライミングの関係

暴力に関することの効果には、短期的に乘じる効果と長期的に形成される効果とがある。情報処理に影響することで攻撃的な反応を導くと仮定される効果のうちでも、短期的効果はその状況で見たものや内的状態に反映される即時的効果があり、長時的効果は繰り返して行われた経験や観察によって学習され、知識や反応体系として結晶化することによる効果である。短期的に生じる効果として、プライミングが挙げられる (Huesmann & Kirwill, 2007)。認知心理学では、人の心の中で様々な概念が相互にネットワークを形成していると仮定されている。一つ概念が活性化するとそれに結びついた他の概念も活性化することが示されており、これをプライミング効果と呼ぶ (北山, 2001)。観察した暴力は、攻撃的な期待や情動に関連する概念を活性化し、そのために、それらのアクセスが一時的に高められて、その後の情報処理に利用されやすくなると考えられる。暴力のプライミングが暴力に関連する期待を活性化することで、先に述べたように相手の行動意図があいまいな状況では、この行為が挑発と解釈されることが起こりやすくなるであろう。

本研究の仮説

本研究では、プライミングが道徳性や攻撃性に及ぼす影響力を検討する。また、先行研究に残された問題として道徳性と攻撃性の因果関係について探索的に検討する。プライミングは図1に示した環境に由来する手がかりとして想定される。道

徳不活性化という潜在知識構造はその手がかりの解釈に影響を及ぼす。その結果として攻撃性が高まると予測される。本研究では、不道徳類語辞典から道徳関連単語をプライミング刺激として、不道徳関連単語を使用するプライミング条件 (実験群) と、中性的単語を使用する条件 (統制群) の2条件を設定した。これらの単語を用いた乱文構成課題終了後に攻撃性および道徳的不活性化を質問紙により測定する。実験計画は、実験群と統制群の被験者間要因1 要因2水準、従属変数は道徳不活性化尺度得点、攻撃性尺度得点である。

仮説

- 仮説1、プライミング条件下では統制群に比べて道徳不活性化得点が増えるだろう
 仮説2、プライミング条件下では統制群に比べて攻撃性得点が増えるだろう。
 仮説3、道徳不活性化は攻撃性とプライミング条件間の媒介変数として働く因果関係が見いだされるだろう。

この仮説を図2にまとめる。

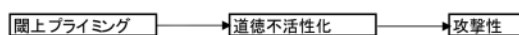


図2 想定される仮説

方法

1. 実験参加者

京都府内の大学に所属している大学生が実験に参加した。質問紙は大学1年生向けクラスと3,4年生クラスの2回に分けて実施された。受講者は男子大学生51名 女子学生30名の81名である。質問紙の半数を実験群、半数を統制群として、ランダムに配付した。調査時間は15-20分であった。質問紙の不備、留学生および博士提出者を除いた男子大学生48名 女子大学生28名を本研究のデータとする。平均年齢は19.8歳で、実験群(男性18 女性21) 統制群(男性29 女性7)である。このうち、質問紙の順序に誤りがあったため、一部のデータでは道徳不活性化尺度得点が欠損値として扱われている。

2. 手続き

調査は集団状況で実施された。調査目的は使用言語と規範意識に関する調査と説明された。質問紙の2ページ目に乱文構成課題が設定されている。プライミング課題を終了したのちにスピルバーグのSTAXI 攻撃尺度（4件法）道徳不活性化尺度（7件法）への回答を求めた。

2.1 プライミング刺激

プライミング刺激として、10個の乱文構成課題を作成した。乱文構成法とは、指示された単語すべてを使い並び替えて文法上意味の通る文章を作ってもらった課題である。その単語の中の1語だけを変えて実験群と統制群を設定した。実験群の乱文構成課題には不道徳類語辞典から選んだ不道徳10単語が使用された。「守らない」「叩く」「壊す」「盗む」「潰す」「破る」「嘘」「ケンカ」「傷つける」「突き刺す」の10単語である。統制群では不道徳単語以外の単語は変えず、上述の単語を「守る」「揉む」「変える」「つかむ」「嗅ぐ」「玩具にする」「一息」「のろけ」「割れた」「火をつけた」に変えた。例 実験群（①守らない②ルール③いつも④遊びの⑤彼は）

統制群（①守る②ルール③いつも④遊びの⑤彼は）

2.2 STAXI 攻撃尺度

STAXI 攻撃尺度は状態怒り、特性怒り、怒り表出の下位尺度に分かれている。そのうちの怒り表出下位尺度は、さらに怒りの表出、怒りの抑制、怒りの制御の3つの項目群に分かれる。この質問紙に順に4件法で回答してもらった。怒りの特性や状態、表出のどの部分がプライミングや道徳性と相関を持つか、探索的に検討することを目的として、すべての尺度から項目を選んだ。

2.3 道徳不活性化尺度

道徳不活性化要因としてはBanduraが開発した道徳の不活性化を測る尺度を用いた。下位項目には身体的な障害や破壊を伴う行為、暴言、欺瞞、盗みのいずれかの逸脱行為に関する内容と、教育、家族、地域環境、仲間関係のいずれかの社会的文脈に関連する4項目、計32項目で構成される尺度である。各メカニズムを測定するバリマックス回転を伴う修正分析の結果から、同尺度には1因子の単純構造が確認されている。因子寄与率は

16.2パーセントであり高い内部一貫性がみられる（ $\alpha = .82$ ）。

結果

1. 因子分析

1.1 攻撃性尺度

STAXI 攻撃尺度34項目に因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行い固有値1以上の因子を抽出したところ、9因子が見いだされた。結果を表1に示す。固有値2以上の変数に命名して、それぞれの因子負荷量が.40以上である項目の合計点を下位尺度とした。

第一因子に負荷量の大きい項目は誰かを「怒鳴りつけたい」「何かを壊してしまいたい」「誰かを殴りたい」「精根尽きてしまった」「口汚く罵りたい」であった。したがってこの因子は誰かに怒りをぶつけたいという気持ちを表す因子と解釈できるため、“他者攻撃”因子と命名された。

第二因子に負荷量の大きい項目は「気が短い」「怒りっぽい」「せっかちである」「他人の間違いで自分が遅れたりすると腹を立てる」「すぐかっとなる」「人前で非難されるとかっとなる」であった。したがってこの因子は怒りやすい特性を表す因子と解釈できるため、“怒り特性”因子と命名された。

第三因子に負荷量の大きい項目は「怒り狂っている」「イライラしている」「怒りを感じている」「逆上している」であった。そたがってこの因子は自分の内面で抱えている怒りの因子と解釈できるため“内面怒り”と命名された。

第四因子に負荷の大きかった項目は「怒りを抑える」「怒っていても外にあらわさない」「人に皮肉なことをいう」であった。したがってこの因子は感じた怒りを制御している因子と解釈できるため、“怒り制御”因子と命名された。

第五因子に負荷の大きい項目は「良いことをしたのに認められないとイライラする」「自分のしたいことが出来ないと誰かを叩きたくなる」「良いことをしても褒められないと腹が立つ」「怒っていても外にあらわさない」であった。したがって、この因子は他者に怒りの原因を帰属していると解釈できるため“怒りの他者帰属特性”因子と

命名した。

第6因子に負荷の大きい項目は「机をバンバン叩きたい」「すねたりふくれたりする」「人に皮肉をいう」「ドアをばんと閉めるような荒々しいことがしたい」であった。したがってこの因子は間接的な怒りの表出をしている因子と解釈できるため、「間接怒り表出因子」と命名された。

第七因子に負荷の大きい項目は「怒りを表す」「人と言いつつたりする」であった。したがってこの因子は直接的に怒りを表出していると解釈できるため“怒り表出”因子と命名した。

第8因子に負荷の大きい項目は「心の中で煮えくり返っていても、それを外にはあらわさない」「気を静めて癩癩を起さないようにする」であった。したがってこの因子は怒りを抑え込んでいると解釈できるため“怒りの抑制”と命名した。

1.2 道徳不活性化尺度

道徳不活性化尺度 32 項目に因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行い固有値 1 以上の因子を抽出したところ 10 因子が見いだされた。結果を

表 2 に示す。固有値 2 以上の変数に命名して、それぞれの因子負荷量が .40 以上である項目の合計点を下位尺度とした。

第 1 因子に負荷の大きい項目は「悪い環境で生活していれば、荒っぽい行動をするようになっても仕方ない」「友達が荒っぽい言葉を使っていれば、子供が汚い言葉を使うことを責められない」「友達にそそのかされたならば。間違った行動をしても責められない」「先に制限を守っていない子がいれば、規則を破ろうとしているだけの子は責められない」であった。したがってこの因子はその子の責任祖を他者の責任に転嫁していると解釈できるため“責任の転嫁”因子と命名した。

第 2 因子に負荷の大きい項目は「動物のように扱って当然の人もいる」「虫けらのような人間は酷い扱いを受けても仕方ない」「気に入らない人は人間として扱われる価値がない」「危害を与えられたことに気づきにくい人は乱暴に扱われても仕方がない」であった。したがってこの因子は人を人として扱わない価値観と解釈できるため“非

表 1 攻撃性尺度 因子分析結果

項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6	因子7	因子8	因子9	共通性
怒り状態5	.957	-.040	-.136	.022	.032	-.155	-.096	-.140	.050	.786
怒り状態10	.910	-.015	-.005	.014	.104	.019	.046	-.068	.108	.828
怒り状態4	.905	-.016	.036	-.108	.285	.024	.094	-.170	.038	.778
怒り状態8	.793	-.033	.134	-.009	-.177	.056	.159	.243	-.184	.810
怒り状態9	.415	.256	-.165	-.170	-.035	-.051	-.357	.089	-.069	.374
怒り状態1	-.106	1.007	.042	-.056	.092	.206	-.040	-.021	.058	.938
怒り状態3	.031	.879	-.122	.072	-.101	-.115	.038	.047	.086	.850
怒り状態2	.181	.736	.110	.120	-.194	-.152	.097	.161	.214	.828
怒り状態6	.415	.473	-.002	.055	.118	.048	-.084	-.217	-.155	.738
怒り特性6	.129	.047	.904	-.066	.088	-.183	.027	.027	.182	.781
怒り特性1	-.114	-.019	.796	-.010	.017	.116	-.020	-.069	-.072	.703
怒り特性2	.060	.143	.723	-.008	-.166	.024	-.077	-.068	-.218	.709
怒り特性4	.011	-.211	.565	.112	-.079	.072	-.188	.179	.024	.626
怒り特性3	-.128	.013	.452	.301	-.115	.048	.113	-.013	-.099	.456
怒り特性10	.032	-.063	.026	.833	-.022	-.264	-.047	.004	.068	.708
怒り特性5	-.044	.050	.290	.769	.200	.053	.136	-.074	-.087	.792
怒り特性8	-.061	-.123	.273	.546	-.059	-.187	-.160	.034	.122	.716
怒り特性9	.203	.071	-.090	.420	-.036	.096	.051	.023	.125	.352
怒り表出13	-.150	.210	-.085	.412	-.025	.161	-.082	.111	-.011	.234
怒り表出12	.226	-.050	.243	.277	.276	.096	-.024	.062	.039	.273
怒り表出1	.112	.051	-.007	.139	.833	-.117	-.072	.044	-.323	.633
怒り表出3	.024	-.120	.080	-.104	.773	.130	.099	.055	.090	.662
怒り表出7	.108	-.051	-.181	.044	.556	-.044	-.281	.183	-.259	.597
怒り表出10	.143	.092	-.187	.066	.389	-.216	-.006	.387	-.039	.581
怒り状態7	.254	.014	-.220	.150	-.163	.619	.138	.060	-.092	.909
怒り表出8	.114	-.072	.187	-.184	-.085	.563	-.003	-.052	.102	.433
怒り表出4	-.161	.177	.019	.065	.236	.585	-.192	-.114	.437	.529
怒り表出5	-.076	.026	-.030	-.033	.165	.452	-.090	.073	-.028	.136
怒り表出6	.242	-.095	-.028	-.038	-.293	.388	-.313	.187	.234	.564
怒り特性7	-.106	-.035	.067	.048	.088	.170	-.911	.015	.115	.997
怒り表出9	-.158	.067	.027	-.080	.374	.173	.154	.760	-.009	.815
怒り表出14	-.086	.000	.020	.088	.024	.026	-.135	.522	-.159	.323
怒り表出2	.015	.126	-.040	-.022	-.455	-.139	-.049	-.098	.646	.603
怒り表出11	.209	-.039	-.077	.207	-.136	.272	.003	-.084	.468	.584
因子寄与	6.065	5.207	4.929	4.418	4.248	4.002	2.621	2.493	1.666	

人間化”因子と命名した。

第3因子に負荷の大きい項目は「たまにハイになることは悪いことではない」「誰にも害を加えないような小さなウソをつくことは問題ではない」「人に害を加えるようなことをするのを仲間と一緒に決めたのなら、その中の誰かだけ責められるのは公平ではない」「友達をトラブルに巻き込まないためにウソをつくことは問題ではない」であった。したがってこの因子は自分の行動を自分の都合の良いように見積もっていると解釈できるため「都合の良い責任の見積もり」因子と命名した。

第4因子に負荷の大きい項目は「大金を盗むことに比べたら、少しのお金を盗むことはそれほど深刻ではない」「叩いたりすることのほうがもっと酷いので、クラスメートを侮辱することぐらいは問題ではない」であった。したがってこの因子は都合の良いように自分の行動を比較し、正当化していることから「都合の良い比較」と命名した。

第5因子に負荷の大きい項目は「人を叩いたり

押ししたりすることはただの冗談に過ぎない」「気に入らないクラスメートを叩いても、それはただ物事の善悪を教えているに過ぎない」「許可なく誰かの自転車を盗んでも、それは借りているに過ぎない」であった。したがってこの因子は道徳性が歪曲していると解釈できることから“道徳的歪曲”と命名した。

第6因子に負荷量の大きい項目は「しつけがされていなければその子供が間違った行動をしても仕方がない」「不良は不良仲間が引き起こした問題の責任をとがめられるべきではない」「人を叩いたりすることに比べれば、ものを壊すことは大したことではない」であった。したがってこの因子は置かれた環境で非行を許容していると解釈できるため“環境による同情”と命名した。

第7因子に負荷の大きい項目は「子供のなかで侮辱しあっても誰も傷つかない」であった。したがってこの因子はそのことによっておこる結果を無視していると解釈できるため“結果の無視”因子と命名した。

表2 道徳不活性化尺度 因子分析結果

項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6	因子7	因子8	因子9	因子10	共通性
道徳11	.785	-.124	-.054	-.010	-.143	.068	.096	.047	.051	-.107	.557
道徳12	.775	.201	.066	-.503	-.068	-.035	-.061	.068	-.009	-.018	.692
道徳9	.661	.080	.144	.171	.145	-.100	.015	.023	-.183	.118	.787
道徳13	.653	-.067	-.220	.256	-.344	.078	-.239	.172	.159	.020	.730
道徳14	.522	-.157	.061	-.028	.337	-.021	-.030	-.123	-.018	-.213	.562
道徳16	.313	-.040	.268	-.221	-.137	.048	-.005	-.060	-.091	-.027	.170
道徳32	-.048	.909	.129	-.366	-.036	-.065	-.086	-.054	.103	-.060	.803
道徳30	-.130	.770	-.054	.174	-.115	.067	.093	.019	.036	-.009	.625
道徳31	.124	.703	.046	.018	-.106	.145	-.019	.088	.146	.119	.640
道徳26	.021	-.001	.627	-.423	.083	-.106	-.003	.166	-.007	.103	.376
道徳4	.102	.126	.559	.036	-.312	.057	-.032	-.323	.079	-.054	.529
道徳5	-.187	.207	.558	.114	-.305	.061	.140	.035	.240	-.042	.598
道徳1	-.118	-.178	.509	.183	-.218	-.099	-.256	-.008	-.058	-.410	.659
道徳17	.354	-.137	.497	.048	.122	.213	.263	.095	-.018	.071	.595
道徳10	.417	-.118	.444	.180	.077	.044	-.032	-.067	.199	.295	.755
道徳2	-.062	.062	.362	.118	.152	.082	-.165	.152	-.334	.008	.565
道徳29	.069	.465	-.174	.774	-.011	-.112	.058	-.034	-.168	-.094	.923
道徳21	-.124	-.135	-.065	.676	.002	-.050	-.073	-.006	.304	-.089	.453
道徳15	.106	.105	.121	-.004	-.851	-.141	-.090	-.056	-.174	-.069	.498
道徳20	-.127	-.031	.053	-.043	.492	.478	-.253	.019	.164	-.012	.549
道徳19	.311	.149	.035	-.167	.000	.817	-.013	-.093	-.180	-.084	.838
道徳18	.042	.028	.002	.015	.283	.808	-.012	-.098	-.036	-.112	.695
道徳27	.373	.064	-.019	.044	.229	-.536	.016	-.074	.096	-.058	.467
道徳25	-.085	.279	-.171	.048	.074	.309	.059	.082	-.166	-.211	.296
道徳3	.019	-.022	-.044	.056	-.090	.062	-.1028	.015	-.039	.061	1.000
道徳8	.003	.286	.046	.141	.097	-.094	-.103	.790	.018	.032	.883
道徳7	.329	-.109	.108	-.120	.057	-.044	.097	.531	.130	-.373	.463
道徳28	.369	.104	-.168	.055	.083	.070	-.071	-.499	.185	.052	.444
道徳22	-.104	.108	.206	.134	.008	-.016	.034	-.359	.174	.016	.237
道徳23	-.133	.150	.008	.228	.497	-.055	-.027	.003	.916	-.092	.737
道徳24	.181	.024	.081	.086	-.137	-.121	.063	-.083	.633	-.140	.522
道徳6	.081	.045	-.078	.151	-.056	.153	.073	.114	.194	-.886	.701
因子寄与	4.179	3.048	2.701	2.613	2.575	2.472	2.276	1.942	1.882	1.350	

1.3 下位尺度間相関

以上で得られた下位尺度間の相関を検討した。結果を表3に示す

2 条件効果の検討

2.1 条件間の平均値の差

プライミング各条件に各因子得点の平均の差が見い出されるか、一元配置分散分析により検討した。その結果、間接的怒り表出に (F=3.999 df = 1 P<.05) で有意な差がみられた。次に平均値の差が見いだされた要因は怒り抑制であったが、有意差は得られなかった (F=2.702 df=1 P=.105)。道德不活性化の下位尺度にはすべて有意なプライミングの効果は見いだされなかった。そこで、道德不活性化による間接的効果がないかを回帰分析により検討する。

2.2 重回帰分析

プライミング条件による有意差が見いだされた間接的怒り表出を目的変数として、その他の因子との因果関係を分析するために重回帰分析を用いた。表3より、下位尺度間には多数の相関関係が見いだされている。多重線形性を避けるために、互いに相関のない、他者攻撃、怒り制御、怒りの他者帰属特性、都合の良い責任の見積もり、結果の無視の5尺度得点を投入した。得られた標準偏回帰係数と有意差を表4に示す。他者攻撃、怒り制御、都合の良い責任の見積もりの3要因による影響が見られた。R²=.46であった。都合良く責任を見積もるほど、怒り表出が高まるという関係として、道德不活性化から攻撃性への影響が見られた。

表3 下位尺度間相関

	他者攻撃	怒り特性	内面怒り	怒り制御	怒りの他者帰属特性	間接的怒り表出	怒りの抑制	責任転嫁	非人間化	都合の良い責任の見積もり	都合の良い比較	道德的歪曲	環境による同情	結果の無視	
他者攻撃	1.000														
怒り特性	-.170	1.000													
内面怒り	.636 **	-.125	1.000												
怒り制御	-.010	-.309 **	-.265 *	1.000											
怒りの他者帰属特性	.100	.505 **	.185	-.144	1.000										
間接的怒り表出	.479 **	.099	.360 **	-.395 **	.268 *	1.000									
怒り表出	.275 *	.222 *	.282 *	-.445 **	.284 *	.519 **	1.000								
怒りの抑制	-.132	-.241 *	-.283 *	.554 **	-.171	-.277 *	-.360 **	1.000							
責任転嫁	-.086	.239 *	-.151	.155	.211 *	.044	-.059	-.125	1.000						
非人間化	.118	.192	.013	-.035	.344 **	.037	.102	-.104	.113	1.000					
都合の良い責任の見積もり	.069	-.104	.069	-.183	.153	.327 **	.342 **	-.105	-.015	.158	1.000				
都合の良い比較	-.087	-.027	-.176	.100	.132	-.070	-.067	.016	.397 **	.329 **	-.109	1.000			
道德的歪曲	.192	.021	.130	-.074	.192 *	.163	.177	-.191	.098	.194 *	.045	.294 *	1.000		
環境による同情	-.048	.249 *	-.072	.018	.319 **	.212 *	.072	-.162	.569 **	.190	.225 *	.356 **	.303 *	1.000	
結果の無視	.198 *	.173	.198 *	.012	.219 *	.186	-.090	-.351 **	.237 *	.405 **	-.178	.288 *	.414 **	.243 *	1.000

** p < .01, * p < .05, + p < .10

表4 間接的怒り表出得点に対する下位尺度の影響

係数^a

モデル	標準化されていない係数		標準化係数	t 値	有意確率
	B	標準誤差	ベータ		
(定数)	1.298	.484		2.680	.009
1 他者攻撃	.458	.099	.425	4.617	.000
怒り制御	-.352	.102	-.316	-3.433	.001
怒りの他者帰属特性	.183	.114	.152	1.611	.112
都合の良い責任の見積もり	.125	.058	.205	2.176	.033
結果の無視	.052	.052	.095	1.003	.319

a. 従属変数 間接的怒り表出

次に、怒り抑制を目的変数として、同じ変数を投入した結果を表5に示す。怒り制御と結果の無視による影響が見られた。 $R^2=.41$ であった。結果を無視するほど、怒りを抑制できないという関係として、道徳不活性化から攻撃性への影響が見られた。

考 察

因子分析の結果、不道徳単語によるプライミングが間接的怒り表出に有意に影響を与えていた。しかし不道徳プライミングは道徳不活性化には影響を及ぼさなかった。これらのことから、プライミングが潜在記憶構造の一つである道徳不活性化に影響を与えると考えられるという仮説1は支持されなかった。しかし、攻撃性がプライミング条件により上がるとした仮説2は支持された。道徳不活性化に直機影響が示されなかったことについては、道徳性という複雑な規範意識が不道徳単語を見せられただけでは活性化されなかった可能性があり、プライミングを使い不道徳関連の概念を活性化させたとしても、人を殴ってもよいなどのルールの判断などにまで影響を及ぼさなかったのではないかと考察できる。

不道徳プライミングは怒り特性や状態怒りには影響を及ぼさず、怒りの表出に影響があることが分かった。このことから不道徳プライミングは特性・潜在認知などのレベルではなく、感情レベルの早いルートに影響を及ぼすのではないかと考え

られる。そのため、道徳不活性化は、認知的な遅いルートだったことが考えられ、プライミングの効果が表れなかった可能性もある。また有意な差とは言えなかったものの、データ数を増やすことにより、不道徳プライミングは怒りの抑制に負の影響が見いだされると思われる。

不道徳プライミングにより攻撃性の表出に影響を与えることが本研究により示された。道徳不活性化のプライミングを促した群は、そうでない群よりも後の攻撃性が上がると考えられる仮説2の結果は一部ではあるが支持された。これはAnderson, C AらのGAMに元づく実験研究である、ゆがんだ攻撃的思考を活性化（プライミング）させることにより、活性化された攻撃的行動の生起可能性を高めるという先行研究と一致する。

道徳不活性のプライミングを行うことで潜在知識構造の一つである道徳性に影響を与え、活性化した不道徳性により攻撃性が変化するのではないかと考える仮説3に関して、媒介分析を行った結果、道徳性は有意にプライミングと道徳性の間に媒介していなかった。そのため社会的プロセスが道徳不活性化のメカニズムを説明することはできなかった。しかし媒介はしていなかったものの、道徳不活性化も攻撃性に独立に影響を与えおり、当初の仮説とは違うプロセスが行われている可能性が示唆された。攻撃性が道徳性に影響を与えるという逆のプロセスが行われている可能性がある。

表5 怒りの抑制に対する下位尺度の影響

係数^a

モデル	標準化されていない係数		標準化係数	t 値	有意確率
	B	標準誤差	ベータ		
(定数)	1.271	.516		2.463	.016
1 他者攻撃	-.057	.106	-.052	-.538	.592
怒り制御	.623	.109	.553	5.710	.000
怒りの他者帰属特性	.018	.121	.015	.149	.882
都合の良い責任の見積もり	.003	.061	.004	.043	.966
結果の無視	-.175	.056	-.313	-3.135	.003

a. 従属変数 怒りの抑制

今後の課題

潜在知識構造に影響を与えると仮定される外的刺激として、プライミングを用いたが、プライミング刺激が道德性に影響を与えなかった理由として、道德性という複雑な概念を単語の並び替えという単純なプライミングで行ったため、概念の活性化まで至らなかった可能性があるだろう。そのため、今後は単純な刺激ではなく、より複雑な概念に働きかける刺激を用いる必要があるといえる。また、質問紙の順番として、プライミングの後に攻撃性尺度を測定したため、道德不活性化の尺度測定の時までプライミングの効果が持続していなかった可能性もある。その為、今後プライミングを用いる場合にはプライミングの継続時間など考慮し、違う尺度を用いるたびにプライミングを行うなど工夫が必要と思われる。

参考文献

- Freud, S. (1920). Beyond the pleasure principle. SE, 18: 1-64.
- Beck, A. T., Rush, A., Shaw, B., & Emery, G. (1979). Cognitive Therapy of Depression. New York The Guilford Press
- Bandura, A., Barbaranelli, C., Caprara, G. V., & Pastorelli, C. (1996). Mechanisms of moral Disengagement in the exercise of moral agency. *Journal of Personality and Social Psychology*, 71, 364-374.
- 吉澤寛之・吉田俊和 (2004). 社会的ルールの知識構造から予測される「社会的逸脱行向」知識構造測定法の簡易化と認知的歪曲による媒介過程の検討—社会心理学研究, 20, 106-123
- Crick, N. R., & Dodge, K.A. (1994). A review and reformation of social information processing mechanisms in children social adjustment. *Psychological Bulletin*, 115, 74-101.
- Burks, A. (1998). Moral disengagement in the perpetration of inhumanities. *Personality and Social Psychology Review*, 3, 193-209
- Nummenma, L., Peets, K., and salmivalli, C. (2008). Automatic activation of adolescent peer- relation schemas: Evidence from priming With facial identity. *Child development*, 79, 1659-1675.
- Paciello, M., Fida, R., Tramontano, C., Lupinetti, C., and Caprara, G.V. (2008). Stability and change of moral disengagement and its impact on aggression and violence in late adolescence. *Child Development*, 79, 1288-1309.
- Pelton, J., Gound, M., Forehand, R., Brody, G (2004). The moral disengagement scale: Extension with an American minority sample. *Journal of Psychopathology and Behavior Assessment*, 26, 31-39
- Bandura, A. (1999). Moral disengagement in the perpetration of inhumanities. *Personality and social psychology Review*, 3, 193-209
- Baumeister, R. F. (1997). Evil: inside Human cruelty and violence. New York: W. H. Freeman and Company.
- Bandura, A. (1996). Moral disengagement in the perpetration of inhumanities. *Personality and social psychology Review*, 3, 193-209
- Huesmann, L. R., & Kirwil, L. (2007). Why observing violence increases the risk of violent behavior by the observer. In D. J. Flannery, A. T. Vazsonyi, & I. D. Waldman (Eds.), *The Cambridge handbook of violent behavior and aggression*. New York: Cambridge University Press. Pp.545-570.
- Pettit, G. S., & Mize, J. (2007). Social-cognitive processes in the development of antisocial and violent behavior. In D. J. Flannery, A. T. Vazsonyi, & I. D. Waldman, the Cambridge handbook of violent behavior and aggression. New York: Cambridge University Press. Pp.332-343
- Menesini, E., Sanchez, V., Fonzi, A., Ortega, R., Costabile, A., and Lo Feudo, G. (2003). Moral emotions and bullying: A cross-national of differences between bullies, victims and outsiders. *Aggressive Behavior*, 29, 515-530
- Anderson, C. A., & Bushman, B. J. (2002).

- Human aggression. *Annual Review of Psychology*, 53, 27-51.
- Burks, V. S., Laird, R. D., Dodge, K. A., Pettit, G. S., & Bates, J. E. (1999a). Knowledge structures, social information processing, and children's aggressive behavior. *Social Development*, 8, 220-236.
- Burks, V. S., Dodge, K. A., Price, J., & Laird, R. D. (1999b). Internal representational models of peers: implications for the development of problematic behavior. *Developmental Psychology*, 35, 802-810.
- Zelli, A., Dodge, K. A., Lochman, J. E., Laird, R. D., & Conduct Problems Prevention Research Group. (1999). The distinction between beliefs legitimizing aggression and deviant processing of social cues: testing measurement validity and the hypothesis that biased processing mediates the effects of beliefs on aggression. *Journal of Personality and Social Psychology*, 77, 150-166.
- Erdly CA, Asher SA. 1996. Children's social goals and self-efficacy perception as influences on their responses to ambiguous provocation. *Child Development*, 67, 1329-1344.
- 北村英哉 社会的認知の基本的アプローチ(2001)
山本真理子・外山みどり・池上知子・遠藤由美・北村英哉・宮本聡介(編) 社会的認知ハンドブック 北大路書房